

「シャモジでもあっちこっちに投げたら化けるって」

—沖繩における杓子妖怪の伝承とその背景—

栗原 健

はじめに

沖繩の伝説にしばしば見られるのが、豚や牛、山羊、アヒルの姿をした妖怪（マジムン）の話である。美しい女性に化けて男性を誑かす豚の話はよく知られているが、夜道で子豚やアヒルの魔物に股をくぐられるとマブイ（魂）を取られるという話も、南島の伝承の世界ではお馴染みである。

これらの怪異譚の中には、夜半に道ばたで持ち主不明の家畜を見つけたため、樹などに縄で結びつけておいたところ、朝になったら杓子に変化していたというストーリーがしばしば見られる。龕（がん）や棺の板、薪、その他の物に化すこともあるが、杓子が多いことは確かである。実際沖繩には、汁物を掬う杓子が化けた場合は「ナビゲーマジムン」、飯をよそおうしゃもじが化けた場合は「ミシゲーマジムン」と呼ぶ言葉も存在する¹。葬儀の際に遺体を運ぶ龕や棺が怪異を為すことは、死者や凶事とのつながりを考えれば理解することができるが、なぜ日常的な台所用具が妖怪化するのであろうか²。

本論では、沖繩における杓子妖怪譚の特徴を概観し、なぜこれらの器物が化けるとされているのかを考えてみたい。ここで参考になるのが、柳田国男が注目した杓子の象徴性である。杓子はしばしば豊穰のシンボルや除災の護符として用いられて来たが、その背景には、これを神霊や死者の霊が宿る依代的な存在として見る伝承が存在していたと考えられる。杓子はまた、主婦権の象徴として女性にとっても特別な道具であった。こうした日本の習俗と沖繩の妖怪話とを結び付けることができるか、この論考で検討してみたい。結論が不十分であることは予め認めるものであるが、一見単純に見える妖怪話の背後にいかにか豊富な民俗の世界が広がっているか、興味を持って頂ければ幸いである。

考察にあたり、まず用語について確認するべきであろう。上で見たように、言葉の上では杓子としゃもじ、ナビゲートとミシゲートは区別されているが、民俗学では両者の区別には曖昧な部分がある。宮本馨太郎は「杓子はシャモジともいう。飲食用具の一種で、飯を盛り、汁をすくうのに用いられる」とし、「カイ」といった古来の呼称は、地域によってどちらの道具にも使われて来たことを指摘している³。柳田国男も、「現在では飯をよそうのはシャモジ、汁を掬むものはシャクシと区別するに至ったが、勿論もとは一つである」と述べているが⁴、実際「しゃもじ」という言葉自体、杓子の「杓」に「文字」を付けて作られた女房言葉であり、語源は同じなのである⁵。これは形態についても同様であり、柳田は昔のしゃもじについて、「背にも丸味を持ち、内側も少しく窪み、事によっては今日

の粥をでも掬ふことが出来た」と述べており、2つの用途の違いが必ずしも明瞭ではなかったことがうかがえる⁶。本論では、依拠した原文の中で区別が為されている場合は「杓子」「しゃもじ」と分けて記すが、柳田の議論や全般的な文章の中で「杓子」と書かれている場合は、飯用のしゃもじ・汁物の杓子双方を指すものと理解されたい。

1 沖縄における杓子の怪

杓子が動物に化けることは、早くも昭和4年(1929年)に刊行された島袋源七の『山原の土俗』にも言及されており、「△しゃもじや杓子の古物は捨て、はならぬ。○白豚の幽霊になるから。」と記されている⁷。「ミシゲー・マジムン」「ナビゲー・マジムン」という言葉は、金城朝永の「琉球妖怪変化種目」(昭和6[1931]年)に登場する。「琉球では古い食器物は化けると信じられている」と記した金城は、これらのマジムンの例として、

- 夜中に扉を叩く者がいるので外を覗くと、ミシゲーが落ちていた。
- 夜道で1匹の牛を見つけて牛小屋まで連れ返ったものの、朝になると1本のミシゲーになっていた。
- 毛遊びの男女に出会ったので参加して朝まで楽しんだものの、目が覚めると周囲にはミシゲーやナビゲー、箸が散らばっていた。

といった話を挙げている⁸。このうち長らく人々の間で噂されて来たのは2つ目の話であり、同様の話は各地で採取されている。

昔、若者達が遊んでいる処へ、この位の小さな子豚がグーグー鳴きながら出て来たので、みんなで「捉まえろ、捉まえろ」と言って捉まえた。捉まえた子豚は翌日の朝見てみると、杓文字が結ばれていたようだ。(共通語訳 南風原千代 明治37年生 渡名喜)⁹

…物凄く大きな真っ黒い豚がグーグーしていた。(誰かが) 食事をした田んぼの端だったのでしょう。すると「この野郎は二人で(捕えて)くびって(木に)引きつけて置こうね。」と結えてしまった。(しかし)引きつけて置いたつもりだが、その翌日行ってみると、なんと、杓子になっていたそうよ。(共通語訳 玉城ヨシ 大正1年生 喜名)¹⁰

昔、スーピージャーとか何とかいうて、道から、何して歩きよったって。これを山羊、山羊と思って持ってきてさあ、くくって置いたら、ミヨウニチ(明日)になったら、しゃもじ、しゃもじになっていたという話は聞いた。(山川カメ 明治40年生 今婦仁村古宇利)¹¹

杓子の首をくびってね、木の下にでも捨てると、そこで化けて、くびられた山羊が
べーべーと鳴くという話を聞いた。(共通語訳 比嘉カマド 明治45年生 楚辺)¹²

妖怪はアヒルの姿をして出現することもある。ある人が酒を飲んだ帰りがけ、夜道でア
ヒルを見つけて喜び、家の前の柱に結んでおいたところ、翌朝にはナビゲーターが結ばれてい
ただけだった(久場カメ 大正2年生 沖縄市園田)。話者はこの話に続いて、「シャモジ
でもあっちこっちに投げたら化けるって。(略)アヒルに化けるって。また、そのアヒ
ラーは、股からくぐるとね、大変だそうだ。命を取られるって」と述べている¹³。杓子も
しゃもじも同様に化ける物と見られていたことが分かる。具志川には、牛のバキムン(化
物)を押さえ込んだまま眠ってしまった男性が、夜が明けてみるとミシゲーターとナビゲーターを
手に握っていたという話が伝わっており、両者がセットで人を化かしている¹⁴。

これらの器物が何に化けるか、話者自身もよく理解していないと見られるケースもあ
る。「田んぼに(行くときには)ご飯を入れて持って行くでしょう。それを、草むらで食
べて、その後に、その杓子を草むらで捨てた。すると、その杓子が幽霊になって化けて出
てきたそうだ。」(金城ナベ 明治36年生 松本)¹⁵ どのような幽霊であるかは、述べら
れていない。「(しゃもじが)化けたっていうだけしか聞いてないですけど。わかりません
ける。ただこれだけしか。あれは粗末にしたら化けるっても(聞いた)」「(なにに化ける
かは)化け物ってしか聞いてないですけど、化けるって。そう、ただ、これだけしか、
はっきりとは。」(仲宗根ツル 大正6年生 越来)¹⁶ 怪異の具体的な内容は知らなくて
も、杓子が妖怪化する危険は認識しているという点が興味深い。

2 なぜ杓子が妖怪化するのか

それにしても、なぜミシゲーターやナビゲーターが化けるのであろうか。前述の話でも触れられ
ていたように、杓子をみだりに捨てると変事を起こすため、燃やすのがよいとされてい
た。「このお汁を入れる杓子はあっちこっちに捨ててはいけないよ。(この捨てられた杓子
が)豚に化けて出たそうだ」(共通語訳 知花カナ 明治35年生 波平)¹⁷ 「杓子ね、悪
者になるので、古い杓子やしゃもじはたたき割って燃やしたそうである」(共通語訳 比
嘉カマド 楚辺)¹⁸ 「古サラゲーターや古ナビゲーターは悪物になるということで、それらは昔は
焼くんであって、別の場所に捨てたりはしなかった。自分の畑などに持って行って、焼い
たそうだよ。」(同)¹⁹ 家内で使われている最中の杓子が化けたという話が見当たらない
以上、野良に捨てるという行為が怪を招く要因だと言えそうである。

捨てられた道具が妖怪化すると言えば、すぐ思い浮かぶのが「付喪神(つくもがみ)」
であろう。年末の煤払いの際に捨てられた器物が、自分たちを粗末に扱う人間たちを恨
み、妖怪の群れとなって京の人々を恐怖に陥れたという付喪神の物語は、室町時代から絵
巻物を通じて広く知られており、一連の「百鬼夜行絵巻」図像のイメージ源になったと考

えられる。『付喪神記』は国会図書館デジタルコレクションや京都大学貴重資料デジタルアーカイブ等で見ることができるが、捨てられた器物の中には杓子の姿もあり、しゃもじの形をとどめたまま一つ目の妖怪と化した姿も登場する。

この話の背景にあるものは、人間や動植物のみならず、器物も「古くなるにつれて靈性を獲得し、徐々にその靈力が増大し、ついに自ら変化する能力さえも獲得するに至る」（小松和彦）という思想である²⁰。かつてこれを使用していた持ち主や、丁寧に器物を作った作り手の存在を感じるからこそ、道具も靈性を帯びるように思い、屋外に放り出すことに恐れを感じるのであろう²¹。沖縄の杓子妖怪譚も同様の感覚から来ているのでは、と考えるのが最もシンプルな説明である。

ただし、沖縄の杓子妖怪の話には、本土の話に無い要素を含むものもある。例えば、杓子の変化をキジムナーと結びつける伝承も存在する。「杓子や杓文字、お箸などで、(略)古くなっているからとそれらを簡単に捨ててはいけないよ。そのまま捨てるキジムナーになったそうだ」（共通語訳 山内実 明治34年生 宇座）²² 「しゃもじは陸に捨ててはいけない。海に捨てるべきだが棚原は海に囲まれていないので焼却する。陸に焼かないで捨てるキジムナーになって化ける。」（棚原）²³ 古宇利の山羊マジムンの話をした前述の山川カメも、山羊がしゃもじになったことで「キジムナーということが分かったわけさ」と述べている²⁴。なぜ杓子がキジムナーになるのか、その理由は不明である。棚原からの報告には、キジムナーになる理由として、「しゃもじは食べ物の精を多く持っているからという」と書き添えられているが、納得できる説明とは言い難い。

変わり種として、杓子妖怪は元は人間であったとする伝承も存在する。「悪い人が死んだら、ヤナムン（魔物）になってナビゲー（おたま）に化ける。(略)悪い人が化けてアヒルになったり、ナビゲーになったりするよ。豚になって。」（西平マツ 明治34年生 久保田）²⁵ この場合、悪事を為した人間が来世に行くことが認められずに妖怪化したものがナビゲー・マジムンであり、動物にも変身するということになる²⁶。だがこれはあまり一般的な見方とは言えず、同種の話は少ない。

以上の話を見ても、なぜ数ある器物の中で特に杓子が超自然的な存在になるか、依然として理解が困難である。しかしながら、渡名喜島で採取された以下の伝承は、1つの手がかりを与えてくれるかも知れない。大正10年生まれの大城ハル子が語った話である。「昔、島には『女ぬ使いる道具を一、いちまでん置き一ぬ一、化き一ん（女性の使う道具類は、そのままいつまでも置きっぱなしにしていたら化ける）』という伝えがありました。小さいころよく家の父親が話していました。」話者はこの後、ある力持ちの老翁が化物の牛を捕まえたところ、牛は「機織りの把手」になったとの怪異譚を語っている²⁷。杓子ではないが、杓子も織機も共に女性が用いる物である以上、「女ぬ使いる道具」が化けるといふ俗信と関係がありそうである。

豚妖怪譚に詳しい田畑千秋も、杓子と女性のつながりに気付いた一人であった。田畑は

杓子が豚に化けるのではなく、豚が杓子に化けると見ているのであるが、彼は豚が女性に化ける話が多いことに注目し、「杓文字を女の人格の象徴として無意識のうちに認めているのかもしれない」と述べている²⁸。杓子妖怪の背景に女性の姿を見るのである。

では、女性と杓子、そして妖怪がどのように結びつくのであろうか。それを探るためには、日本各地に伝わる杓子にまつわる民俗を吟味する必要がある。

3 杓子をめぐる日本の民俗世界

民俗の世界において杓子がさまざまな場面で登場することは、明治時代から指摘されているところである。以下にその例をいくつか見たい。

杓子が持つ象徴性として特に理解しやすいものは、沖縄とも因縁が浅からぬ薩摩の「石像田の神（タノカンサア）」であろう。1700年頃から薩摩藩領（鹿児島県、宮崎県の一部）で造られるようになった田の神像は、今なお1300ほどが現存するとされている²⁹。その姿にはバリエーションがあるが、相当数の像は手にメシゲ（しゃもじ）を持つ僧侶や神官、女性の姿をしている（スリコギや椀、手杵等を併せ持っていることもある）。これらの地域の神社では、田の神の仮装をして舞を踊る「田の神舞」が伝えられているが、その際もメシゲやスリコギを持って踊ることが多い。石像や舞が豊作を祈願するものであり、メシゲが五穀豊穡のシンボルとされていることは明らかであろう。宮崎県内の田の神像を調べた早野慎吾は、田の神像が享保年間に急増した背景として、享保元（1716）年の新燃岳噴火による被害と凶作を挙げており、メシゲにこめられた祈念の切実さが伝わって来る³⁰。

田の神像は薩摩に特化したものであるが、杓子にまつわる信心は全国各地に数多く見られる。関東でしばしば見られるのが「おしゃもじさま」信心である。百日咳等で咳に悩む場合は「おしゃもじさま」の社に参詣し、奉納されているしゃもじを借用する。そのしゃもじで喉を撫でたり、飯を盛って食べたり、枕元に置いておくと回復が早まるというのである。治癒の後には、しゃもじを2本にして社に戻す。東京・亀戸の石井神社のしゃもじ奉納は、文政年間に既に記録されているよく知られたものであるが、越谷の石神井神社、粕江の玉泉寺等、同様の習俗が伝わる場所が多い。横浜市内には15か所以上の「おしゃもじさま」が散在しており、令和3（2021）年には市内本法寺その他に保存されている奉納杓子1367点が市指定文化財に指定されている³¹。

しゃもじが信心のオブジェになっている理由については、「石神（しゃくじん）」から「杓子」に転化したと語られることが多いが、この説は説得力に乏しい。実際、厄除けや病魔退散の護符としてしゃもじを戸口に付ける習慣がかつては各地に存在しており、元々しゃもじに霊力があると信じられていたことから派生したものであろう。岸田首相がウクライナのゼレンスキー大統領に贈呈して話題になった宮島のしゃもじも、「めしとる」から生まれたとの俗説は後付けと言うべきである³²。

杓子は、女性の生活においても縁が深いものとされていた。家族の食事を配分する杓子が、家を切り盛りする主婦権の象徴とされていたことは、様々な地域に伝わる「シャクシワタシ」「ヘラワタシ」「イギョウヲワタス」といった言葉に現れている。嫁は自動的に主婦の地位を得るのではなく、姑から然るべき時にその地位を譲られてから初めて家政を握るのであるが、その際には、しばしば家族の前で姑が嫁に杓子を渡す儀式が行われた。杓子を渡された嫁は、以後主婦として炉端でもカカザに座ることとなり、祖先祭祀の役も担うことが認められる。こうした儀式を経る前に嫁が杓子に触れることは、タブーとされていた。杓子が女性の人生にとっていかに重要な物であったかが理解できる³³。

以上の例を簡単に見ただけでも、杓子が単なる台所用具ではなく、多様な意味合いを帯びた霊的なオブジェであり、殊に女性と深い関わりがあったことが理解できよう。このことは、既に明治時代から一部の民俗学者の興味を惹いていた。

杓子に関する研究としては、早くも明治41(1908)年には出口米吉による「飯杓子に対する俗信の由来」が登場している³⁴。この中で出口は薩摩の田の神に注目し、しゃもじを「食物の表識」として「食物の豊富又は五穀の豊穰を表す」と見る³⁵。同時に彼は、米寿の祝いの際に杓子を戸口に掲げる慣習や、「三夫婦そろった家のしゃもじを盗めば長者になれる」といった俗信を収集し、しゃもじが招福の象徴ともされていることを指摘した。

出口に続いて杓子に注目したのが柳田国男である。彼は大正7(1918)年、『土俗と傳説』誌に「杓子と俗信」「おたま杓子」「杓子・柄杓及び瓢箪」の3篇を連続して掲載し、その中で杓子にまつわる種々の風習を検討する。「釜や甑や椀・折敷の類には具はらずして独り杓子にのみ付随して居た『まじ』の力は、そもそも如何なる性質のものであつたらうか」という疑問が彼の興味を刺激したのである³⁶。前述のような「おしゃもじさま」信仰、戸口のしゃもじ、祭礼における杓子の役割、杓子が付く地名といった事例を挙げた柳田は、「石神から杓子に転化した」といった類の俗説に苛立ちを隠さず、杓子を単に豊穰の象徴と見る出口の説にも不満を示す³⁷。全国各地の祭礼や習俗等に杓子が登場する以上、その由来は単なる語呂合わせや地元の故事に基づくものではなく、「元来この物に付随して神異なる作用が語り伝えられて居た結果」と考えるのである³⁸。

柳田は、古人が杓子のことを「靈魂の宿る所と見て居つた」と推測する。特に彼は、辻に出て杓子を以て人を招く所作をすると客や待人が来る、或いは杓子に招かれると死が来るといった俗信に注目して、「その表向きの商法と全く関係のない『招く』と言ふことが、常に大なる働きをして居る」ことを指摘し、これらは「杓子に人の魂を攝取する力があると考へられたものと見ることによつて、始めて説明が可能である」とする³⁹。足利郡福居で採取された、死者が出た家では籠や箆を座敷で転がし、杓子を付けて野に捨てるとの風習に、彼は「死人の霊をして杓子に依らしめたか」と想像する⁴⁰。赤子の出産を促すために杓子で招く風習が一部地域に存在することは、杓子が人の生死とつながる存在であ

ることを示唆しており、同じく杓子の霊的な性格を示すものと彼は見るのである⁴¹。

女性との関係についても、柳田は見逃していない。姑から嫁が杓子を引き継ぐシャクシワタシの儀式をふまえて、杓子を主婦の「一種の regalia」であると考え。ここで彼は、山の神が杓子を携えているとの伝承に注目し、女房のことを山の神というのは同様に杓子をシンボルとしているからだ、と見るのである⁴²。

柳田の深い関心にもかかわらず、残念ながら彼の後にこのトピックについて組織的な研究が行われた様子は無い。僅かに中国の東北民俗学院助教授の王秀文による研究（1997年）が存在するが、概ね柳田の視点を基調として新たな情報を加えたものである。この中で王は、杓子を「オタマジャクシ」「おたま」ということに注目し、杓子を神霊（たま）が寄り憑く依代と見做す。その杓子を扱うのが主に女性であることは、女性の神霊への近似性を示すと強調するのである⁴³。

柳田の主張をそのまま受け入れる必要は無いが、こうした議論を見るだけでも、杓子が特別な道具であったことが理解できよう。神霊を宿すオブジェや招福・魔除けの道具として、様々な力が杓子には帰せられていたのである。また、女性とのつながりが深く、そこには豊穰をもたらす山の神や山姥のイメージも重ねられていた⁴⁴。このような器物をみだりに捨てることが戒められたことは、容易に想像できる。杓子のような「女性が使う道具類は化けやすい」というイメージは、神霊に対するこうした女性の近さから来ているのではないだろうか。

4 一乗谷の杓子と「化物草紙」の物語

以上の議論を補足するために、柳田や王が言及していない2つの史料を紹介しておきたい。

杓子の「招く」機能について、越前一乗谷の町屋跡から、近年その証拠となる物が出土している。この杓子には、片面には打出の小槌や俵、宝袋や宝玉が描かれ、もう片方の面には鶴と男女の姿が描かれている。「湧き出る生命力、五穀豊穰や子孫繁栄をシンボリックに表し、祈願したもの」（小野正敏）であることは明らかであり、実際に幸運を招くものとして作られたのであろう⁴⁵。柳田の見方を裏付けるものと言うことができる。一乗谷が戦火で滅んだ悲劇の地であることを考えると、杓子にこめられた人々の祈りは一層心を打つものがある。

2点目は、捨てられた杓子が化けた話として「付喪神記」以外の例を見たい。1500年頃に、恐らく土佐光信周辺で成立したと考えられる「化物草紙絵」（ポストン美術館蔵）である。九条辺りの「あれたる家」で女性がかち栗を食べていると、炭櫃（囲炉裏のこと）の縁から白々とした手が出て、ものを乞うように見えた。女性は、「いとふしきなれとも手のいたいけしたるほとにさまておそろしき心地もせて」1つ栗を分けてやった。その後も手は続けて現れ、そのたびに栗を分け与えたのであるが、4、5回出現した後、姿を見

せなくなった。女性が炭櫃の下を見てみると、白い杓子が転がっており、栗もその脇に落ちていたという⁴⁶。

「化物草紙絵」に収められている物語は、戦乱で荒れ果てた都に住む男女がわび住まいで体験する怪異を描いたものであり、寂漠とした雰囲気が漂っている。俄かに出現した白い手に可愛さをおぼえて栗を渡す女性の姿には、彼女を包む仄暗い孤独感が伝わって来て、ある種の凄味も感じさせよう。杓子がなぜ手の姿で出現したのかは不明であるが、何も因縁が語られないだけに却って強い印象が残る⁴⁷。こうした話が伝えられたのも、杓子が単なる道具ではなかったからこそであろう。

5 沖縄・奄美の習俗と杓子

以上のことを考えれば、杓子が妖怪化することも頷ける。ここでいよいよ、果たしてこの議論を沖縄にもあてはめることができるか否かが問題となる。沖縄や奄美といった南島には、日本のような杓子にまつわる俗信・習俗が存在するのだろうか。残念ながら、本論ではその答えを出すことができない。現在のところ著者は、参考となる情報をほとんど見つけることができずにいるからである。

僅かな例外として、奄美大島に伝わる奇妙な話が挙げられる。「『飛びつこう飛びつこう』と呼ぶ声に返事をした子どもが何かにとびつかれ、重くて歩くことができずに這って家に帰り、母親にミシゲ（杓子）で叩いてもらったなら金になった。」⁴⁸ いわゆる「金霊」の出現であろうか。同種の話は山口県等にも伝わっているが、ここでは母親が子どもをミシゲで叩いたことが興味深い。杓子が霊の正体を明かすための呪具として機能しているからである（そして、ここでも巫女のように杓子を用いるのは女性である）。しかしながら、こうした杓子の用法について南島では他に例が見当たらない。魔除けの護符として、或いは家の祭祀や葬送儀礼に際して杓子が役割を果たしたという話も、特に見出すことができない状態である。

とはいえ、何のいわれもない道具に「化ける」というイメージだけがつきまとっているとすれば、その方が奇妙であろう。杓子を捨てることが禁忌とされているのは、何らかの霊が取り憑くことを忌むためと考えるほうが自然である。先に触れた「しゃもじは食べ物の精を多く持っている」という声や、「ミシゲー（杓文字）とナビゲーに物の精がつき（豚は）ミシゲーだったようだよ。やっぱり物の精はあるらしいね。（昔の人は）話しておられた。それは自分で見た事だったそうだ」（共通語訳 玉城ヨシ 喜名 原文：「ミシゲーとうナビゲーと一、物ぬ精ぬちち、あんしミシゲーるやて一ぎさんで一。やっぱし精ぬあるふーじど一、物ぬ精りち話しみしえーたん。うれ一本当に自分くる一見ちやる事やたさ）」といった言葉を見ると、杓子には依代的な側面があったと想像できる⁴⁹。実際、杓子は生者の家族だけでなく、神霊や死者に対する供物をも用意するものであり、ある意味境界的な道具ではないだろうか。恐らくそこには、オナリ神としての役割を果たしてい

る女性の用具であることも関わって来るのであろう。

しかしながら、裏付けとなる情報が欠けている以上、上の議論は仮説に留まらざるを得ない。これもひとえに著者の知識が浅い故であり、ご存知の方があれば是非ともご教示を賜りたい。

参考までに、関連の有無については定かではないが、柳田の杓子観とつながる可能性がある伝承として、以下に2つのトピックを挙げておきたい。

1つは奄美に伝わる天女の伝説である。奄美大島の笠利村の男が、奇妙な体験をしたという。山に薪を取りに行った彼が喉の渇きをおぼえると、目の前に天女（アマオナグ）が現れ、水の入った柄杓を出した。ここで注意が必要となる。天女が手のひらを下にして柄杓の柄を持っている場合は、水を飲むと命を取られてしまう。手のひらを上に向けて持っている時は飲んでよいのだが、下に向けている時の方が多いという。この男の場合は、水を飲まなかった⁵⁰。

水を差し出す天女が死を招くというイメージは強烈であるが、柄杓と杓子の近似性を考えると、薩摩の田の神の姿と似ている部分がある。また、柄杓が生死を司ることは、前述の杓子の霊性を思い起こすものがある。田の神のように豊作を授ける明るい存在として登場しないのは、島の厳しい生活環境が反映されているためであろうか。

実は沖縄でも、この天女を彷彿させるあやかしの出現が噂になったことがある。しかしながら、ここでは話の意味合いは変わり、器物の象徴性も見失われている。以下は今帰仁村平敷の女性が語ったものであるが、いつ頃の出来事であるかは不明である。

学校の松がありますよね、小学校のところに、あの辺りにですね、サナゲーマブイって言ったら分かるかね。ひやくし、おつゆの、あれを持っているって言う噂をよく聞いたんですがね。ここら近辺のねー。本当に恐かったよね。それまではあまり、こう分からないんですけど。噂で、こんなのが出るからよー、注意しなさいよーと言う話だけ聞いているんです。(略) あっちは恐くってさ。遠回りしてよ。お家に帰りよった (島タマ子 昭和2年生)⁵¹。

汁物の杓子（サナゲー）を持った幽霊が出たので、人々が恐れたというのである。亡霊の持ち物としてはあまりに不自然であり、アマオナグのイメージが背景にあると考えられるが、話者が天女の話を知っていたようには見えない。「サナゲーマブイ（杓子幽霊）」という言い方から見て、この幽霊は杓子妖怪のバリエーションのように思われたのではないだろうか。興味深い変化である。

もう1つは、上江洲均が著書『沖縄の民俗と生活』の中で述べていることであるが、沖縄では古くなった杓子を「最後は木の枝に吊り下げておく」というのである⁵²。確かに、地に捨てることがタブーであるとする、木から吊るして朽ちさせることは考えられる。

現に鳥袋源七も「古い鍋蓋は木に掛けておかねばならぬ」、そうしないとキジムナーが「住む」(取り憑くということであろう)と書いており、同じことが杓子にも言われていたのかも知れない⁵³。どの地域でどの程度広く行われていた慣習であるのか、詳しく知りたいところである。

吊るすと言えば、沖縄には死んだ猫を木に吊るすという習慣が1960年頃まで存在していた。その由来については諸説があるが、年老いた猫を魔性の生き物と見るゆえに、生まれ変わって来ることが無いようにと地に埋めない、或いは他の魔物に対する警告とする、といった可能性が考えられている(同様の風習は中国にも存在する)⁵⁴。杓子もそのように扱うとすれば、やはり杓子に霊が宿っていることを恐れたためと言えるのではないだろうか。

驚くべきことに日本の一部には、「猫が死ぬと、三方の辻に埋め、しゃもじをたてる」(埼玉県秩父郡)、「猫が死ぬと三方の辻に埋めて杓子をたてる」(群馬県群馬郡)、「猫の墓には杓子を立てると化けぬ」(岡山県勝田郡)等の習俗が存在するという⁵⁵。この場合、杓子は猫の霊を宿らせる依代と見られていた可能性がある⁵⁶。沖縄の場合、猫の死体と杓子を一緒に吊るしたという話は聞かないが、両者のどちらにも木に吊るす風習が存在したとすれば、つながりを考えたくもなろう。杓子が一筋縄では行かない不思議な存在であることが、この話からもうかがえる。今後の研究が待たれるところである。

文末脚注

- 1 村上健司編『妖怪辞典』(第5刷、毎日新聞社、2011年)、318-319頁。
- 2 龕が化ける話は、鳥袋源七の『山原の土俗』にも登場する。鳥袋源七『山原の土俗』(復刻版、名著出版、1977年)、171-173頁。
- 3 宮本馨太郎『めし・みそ・はし・わん』(第4刷、岩崎美術社、1981年)、263頁。「イイガイ」「シルガイ」のように使われる。
- 4 柳田国男『木綿以前の事』(第6刷、岩波書店、1984年)、48頁。
- 5 しゃもじは「『しゃくし(杓子)』の後半を略し『文字』を添えた女房言葉が一般化したもの。」『日本国語大辞典』第6巻(第2刷、小学館、2001年)、1166頁。
- 6 柳田国男「杓子・柄杓及び瓢箪」『定本 柳田國男集』第4巻(筑摩書房、1963年)、257頁。
- 7 鳥袋、209頁。
- 8 金城朝永「琉球妖怪変化種目一附民間説話及俗信一」『怪異の民俗学② 妖怪』(小松和彦編、河出書房新社、2000年)、350-351頁。
- 9 渡名喜村教育委員会編『となきの民話』(渡名喜村教育委員会、1990年)、40頁。「杓文字」は原文では「シルゲー」であり、汁を掬う「杓子」のほうが正確であろう。
- 10 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『喜名の民話』(読谷村教育委員会、1989年)、24頁。「杓子」は原文では「ナビゲー」。
- 11 今帰仁村教育委員会編『今帰仁村の民話・伝承—資料編(下)』(今帰仁村教育委員会、2012年)、408頁。
- 12 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『楚辺の民話』(読谷村教育委員会、1992年)、41頁。

- 13 沖縄市教育委員会『沖縄市の伝承をたずねて 東西部編』（沖縄市教育委員会、2008年）、155-156頁。話者は「ナビゲー」「シャモジ」と述べている。同様のアヒルの話が渡慶次にもある。読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『渡慶次の民話』（読谷村教育委員会、1985年）、36頁。
- 14 小原猛『沖縄怪異譚大全一いにしえからの都市伝説』（ポーターインク、2021年）、125-126頁。伝承の出典は具志川市史編纂委員会『具志川市史 第3巻 民話篇（上）伝説』（1997年）。
- 15 沖縄市教育委員会『沖縄市の伝承をたずねて 中北部編』（沖縄市教育委員会、2007年）、124頁。
- 16 沖縄市教育委員会『沖縄市の伝承をたずねて 怪異譚編』（沖縄市教育委員会、2019年）、17頁。
- 17 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『波平の民話』（読谷村教育委員会、1989年）、14頁。
- 18 『楚辺の民話』、41-42頁。「古い杓子やしゃもじ」は原文では「古ナビゲーや、古サラゲー」。
- 19 同上、40-41頁。
- 20 小松和彦『日本妖怪異聞録』（第3刷、小学館、1994年）、187-188頁。
- 21 長岡千賀「付喪神—他者に思いを寄せる心」『こころの未来』第10号（2013年）、27頁。
- 22 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『宇座の民話』（読谷村教育委員会、1984年）、31頁。
- 23 国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」https://www.nichibun.ac.jp/cgi-bin/YoukaiDB3/youkai_card.cgi?ID=0400022（2024年2月22日閲覧）。情報の出典は：「棚原部落報告（信仰）」『沖縄民俗』22巻（1976年）、127頁。
- 24 『今帰仁村の民話・伝承—資料編（下）』、408頁。
- 25 沖縄市教育委員会『沖縄市の伝承をたずねて 東西部編』（沖縄市教育委員会、2008年）、158頁。
- 26 与輪島には、自殺者は先祖のもとに行くことができず、地上をさ迷って豚の餌を食べて豚と化すという俗信がある。そのような話から杓子に化けるとされたのだろうか。マツザロ・ヴェロニカ「与輪島における妖怪の民俗誌的研究」『沖縄民俗研究』第31巻（2013年）、170、174頁。
- 27 『となきの民話』、38頁。
- 28 田畑千秋「豚妖怪の考察—耳切れ豚の出自」『日本文化の深層と沖縄』（国際日本文化研究センター、1996年）、75頁。
- 29 小野重朗『増補 農耕儀礼の研究』（第一書房、1996年）、269頁。
- 30 早野慎吾「宮崎県諸地域における田の神信仰」『宮崎大学教育文化部紀要 人文科学』第26号（2012年）、33-35頁。
- 31 「令和3年度 新たな横浜市指定文化財」（横浜市記者発表資料 教育委員会事務局生涯学習文化財課 2021年10月19日）；「小机町本法寺 奉納杓子（ほうのうしゃくし）が文化財に」タウンニュース港北区版 2021年11月18日 <https://www.townnews.co.jp/0103/2021/11/18/600501.html>（2024年2月22日閲覧）；佐藤ひろみ・中林みどり「神社祭祀にみる祈りのかたち—越谷のオビシヤ・神饌・祓いの伝統行事を通して—」『生活科学研究』第34巻、166頁；「玉泉寺のおしゃもじ様」狛江市役所サイト <https://www.city.komae.tokyo.jp/index.cfm/45,3364,349,2100.html>（2024年2月22日閲覧）；青梅市郷土資料室「おしゃもじさま」青梅市文化財ニュース第195号（2009年1月15日）；渡辺真治「資料紹介『おしゃもじ神之記』」『神奈川県立公文書館紀要』第9号（2021年）、95-110頁。
- 32 柳田国男も宮島のしゃもじについて、「これを誰かが、日清戦役当時から現象であって、敵を『めしとる』と言ふ縁起を祝したのだなどと、誠に手筒なる口合を以て、歴史を攪乱せむと

- するは宜しくない」と述べている。柳田国男「杓子と俗信」『定本 柳田國男集』第4巻、243頁。
- 33 加藤秀雄「役割交替と〈伝承〉概念の相関性—主婦権と当屋の「ワタシ」儀礼周辺から—」『常民文化』第33巻（2010年）、14-15頁；田薇「鍵と杓子—中国と日本の家における主婦の地位の比較民俗研究—」『比較民俗研究』第1巻（1990年）、87-89頁；宮本、264頁。
- 34 出口米吉「飯杓子に対する俗信の由來」『東京人類學會雜誌』第23巻（1908年）、244-248頁。
- 35 同上、247頁。
- 36 柳田国男「おたま杓子」『定本 柳田國男集』第4巻、249頁。
- 37 同上。
- 38 同上、252頁。
- 39 同上、255頁。
- 40 柳田「杓子・柄杓及び瓢箪」、262頁。
- 41 柳田「おたま杓子」、255頁。
- 42 同上、250-251頁。
- 43 王秀文「シャクシ・女・魂：日本におけるシャクシにまつわる民間信仰」（国際日本文化研究センター、1997年）、1-38頁。
- 44 王の「山の神＝山姥」と杓子の関係に関する指摘は興味深い。実際、山姥の杓子を川で拾ったために福を授かった者の伝承が伊勢にあり、山姥と豊穰、杓子のつながりが読み取れる。国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」<https://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/0150046.html>（2024年2月22日閲覧）
- 45 小野正敏「招福の杓子」『よみがえる中世6 実像の戦国城下町 越前一乗谷』（小野正敏・水藤真編、平凡社、1990年）、169頁。
- 46 「化物草紙絵」の図版・テキストは以下に収録されている。島田修二郎編『新修 日本繪巻物全集』別巻2（角川書店、1981年）。
- 47 なお、器物に霊が宿る話は日本独自のものか、大陸からの伝承の影響を受けて成立したものであるかは定かではない。『搜神記』には、魏の民家で人声や手を打つ音が聞こえる怪異が起き、ある時杓子と枕が話し合っている場面は見られたので、両者を焼き捨てると現象が消えたという話がある。杓子が怪を為すという話が中国にも存在していたことは興味深い。中尾友則「『搜神記』における天人相関」『神女大史学』第34巻（2017年）、61頁。
- 48 国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」https://www.nichibun.ac.jp/cgi-bin/YoukaiDB3/youkai_card.cgi?ID=1720118（2024年2月22日閲覧）
- 49 『喜名の民話』、24頁。
- 50 常光徹『魔除けの民俗 家・道具・災害の俗信』（角川書店、2019年）、206頁。元の出典は金久正『奄美に生きる日本古代文化』（刀江書院、1963年）である。
- 51 今帰仁村教育委員会編『今帰仁村の民話・伝承—資料編（上）』（今帰仁村教育委員会、2012年）、255頁。
- 52 上江洲均『沖縄の民俗と生活』（榕樹書林、2005年）、46頁。
- 53 島袋、209頁。鍋蓋に特別な力があるとする俗信については以下を参照：常光徹『魔除けの民俗学』、164-173頁。
- 54 高橋奈津子「猫の葬法について」『昔話伝説研究』第31巻（2012年）、68-83頁；常光徹「俗信と由来譚—中国浙江省の調査から」『妖怪の通り道—俗信の想像力』（吉川弘文館、2013年）、262-267頁。

- 55 高橋、68-69 頁。
- 56 同上、73-74 頁。『猫の民俗学』著者の大木卓の考え。